

Alterations in Kumite Techniques and the Effects on Score Rates following the 2013 International Judo Federation Rule Revision

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2016-03-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 潔 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2003240

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 32 号

Alterations in Kumite Techniques and the Effects on Score Rates following the 2013 International Judo Federation Rule Revision

(2013IJF 競技ルール改正に伴う組手戦術行動にみる柔道投技スコア取得率の変化)

伊藤 潔 (いとう きよし)

博士 (スポーツ健康科学)

論文内容の要旨

国際柔道連盟が 2013 年に行ったルール改正の主要な目的はダイナミックな施技を際立たせ、観衆を魅了する柔道に変化させることであった。帯下への手や腕による攻撃、防御の一切が禁止され、お互いが帯上を素早く組み、積極的に攻め合うことを要求したルール改正は立ち技の戦術に変化を及ぼすことが予測された。我々は 2013 年のルール改正が立ち技戦術の重要な構成要素のひとつと考えられている組手戦術行動にどのような影響を与えたのかを調査した。本研究の目的は国際柔道連盟が 2013 年に実施したルール改正前後の大会間のスコア比率の変化を組手戦術行動である「組替え行動」の有無、施技直前の「グリップ数：1 or 2 (片手組み or 両手組み)」、施技直前の「組手部位」に視点をあてて分析することであった。

研究データはグランドスラム東京大会 2012 とグランドスラムパリ大会 2013 の男子大会の合計 386 試合であった。その中から投げ技でスコアの確認された 396 場面の映像を抽出して分析を行った。3 名の分析者は講道館柔道 6 段取得者 1 名、7 段取得者 2 名で、かつ、現在柔道指導現場に携わる者であった。組手戦術行動についての判断は全ての分析者の意見が一致したもののみを有効データとした。大会間の変数間におけるスコア比率の差の検定には χ^2 検定を用いた。なお、有意水準 5% 未満を統計学的有意と判断した。

「組替え行動」の有無、施技直前の「グリップ数」、施技直前の「組手部位」において大会間における変数間のスコア比率に有意な差が認められた。具体的には組手スタイルに影響されずに、「相四つ」、「ケンカ四つ」および「トータル」において「組替え行動」を用いての施技によるスコア比率が有意に増加した。施技直前のグリップ数については「相四つ」と「トータル」においてグリップ数 2 の「両手組み」での施技によるスコア比率が有意に増加した。施技直前の組手部位については「ケンカ四つ」と「トータル」において「少なくとも片手で襟と袖以外の部位」を用いての施技によるスコア比率が有意に増加した。

2013 年の国際柔道連盟ルール改正に伴い、「両手組み」や「組替え行動」を用いての施技、スタンダードな組手部位と認識されていた「襟」、「袖」以外の部位を用いての施技の有効性が確認された。本研究より得られた知見は現在、国際大会において戦術資料としてコーチング現場で有効活用されている。